

2 研究の実際 > (3) ピア・メディエーションに関する活動プログラム

エ 活動プログラムの実践**授業の考察の視点と判断の目安****考察の視点について**

支え合う人間関係を築くための支援の在り方として、ピア・メディエーションに関する活動プログラムの開発をしてきました。この活動プログラムの有効性について、小学校6時間、中学校5時間、高等学校3時間の授業を、以下のⅠ、Ⅱの2点を視点に考察します。

授業の考察の視点

- | |
|------------------|
| Ⅰ 本時のねらいを達成できたか |
| Ⅱ 次時につながる内容であったか |

判断の目安について

小林（2010）は、資料1のように、授業で対人関係のスキルを取り扱う場合の「目標スキルの選択基準」⁽¹⁾を示しています（資料1）。

- | |
|---|
| ① 通常子供たちの半数以上が、日常生活で実際に使っているスキル（「スキルの遂行」の度合い） |
| ② 8割程度の子供が、意識さえすれば、そのスキルが使えるスキル（「スキルの獲得」の度合い） |
| ③ 1割から2割が、そのスキルを使うことができないか誤った使い方をしているスキル（「スキルの未学習」と「スキルの誤学習」の度合い） |

資料1 小林が示した目標スキルの選択基準

小林はこのレベルが最適な理由として、授業場面では、その学級の子供の8割が残りの2割のメンバーの優れたモデルになることを挙げて、集団全体のスキルのアセスメントの必要性について述べています。また、授業後には、学級の8割の子供たちのスキルの遂行の度合いが向上したり友達の行動に的確なフィードバックを与えたりすることができるようになるとも述べています。

本研究では活動プログラムの授業で対人関係のスキルを取り扱うことから、資料1の基準を参考にして、視点ⅠとⅡを判断する目安を80%以上に設定しました。授業ごとの振り返りシートを用いて集団全体のアセスメントを行い、その結果80%に満たない場合は、次時の授業の前に、再度学習した内容を取り扱うこととしました。

考察の後の資料（展開案・スライド資料・ワークシート等）の修正について

活動プログラムの実践のための資料（展開案・スライド資料・ワークシート等）は、サイトマップからダウンロードすることができます。これらの資料は、試案を基に授業を実践して考察した後、より良い活動プログラムになるように修正したものです。修正した箇所については、先生方が授業していただくときに特に留意して取り扱っていただきたい点として、考察のページに◇の印を付けて記述しています。

引用文献

- (1) 小林 正幸 『児童心理 10月号臨時増刊』 2010年 p.77